
ユメノミ

花村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユメノミ

【Nコード】

N1679B

【作者名】

花村

【あらすじ】

小さな星と小さな女の子と小さな希望達の物語。

序章

心地よい風。 あたしの髪を、頬を、あたり一面にはえている背の高い草花をやさしく撫でてかけていく。不安定な今の世の中のことなど感じさせないくらい、風は穏やかにふいている。

あたしは大きく息を吸ってみた。緑の香りと、すがすがしい朝の空気が。また朝がやってきて、一日が始まったのだと、改めて感じる瞬間である。

あたしが暮らしているのは、小さな小さな星。きっとこの宇宙（あたしたちは世界と呼んでる）でも小さいほうから100番と素晴らしいほど小さい。

小さくて人も少ない。 こんな小さな星なんて、誰も訪れないと思うだろう。でも、実際はそうでもない。この星には、ほかの星にはない特別な『あるモノ』がある。 それを手に入れるために、お金持ちや貿易目当ての者までいろいろな人などが、

この星を訪れている。

あたしが暮らしているこの小さな星の名前は 『ゲート』

意味は、扉。 希望の扉。

開く者すべてに、希望がもたらされる。

第一章 一話・ロイド（前書き）

中途半端で終わってます。すみません…

第一章 一話：ロイド

俺の将来はすでに決められている。将来は、父親が創立した、星いや宇宙一大きな貿易会社の社長になる。それは生まれた時から決められていたこと。

あとを継ぐために、ちゃんと勉強してきた。成績だって、最高にいい。エリートとかいうやつだ。

父はいつも忙しく相手などしてはくれなかったが、家にはメイドやコックがたくさん雇われており、何も困ることなどなかった。

『愛する息子ロイドへ あれほど訓練所へ近づくなと言ったはずだ。何度言えばわかってもらえるのか…明日、午前8時、社長室へ来なさい。』

父『ロイドは昨日メイドに手渡された手紙を読み返した。汚い字。父はもともと字は綺麗なほうなので、よっぽど忙しかったことが読み取れる。』

父にあうのは約一カ月ぶりになる。この前も同じ理由で呼び出された。もうこどもじゃないし、父らしいこともない人に説教などされたくないと思いつつも、逆らうことなどできはしない。

コン、コン。 ロイドは社長室をノックした。

「父さん、ロイドです。」

しばらくして扉の向こうから声が聞こえた。久しぶりに聞く、父の声。

「入れ」

低い声。まぎれもない父の声。聞いたのは久しぶりで、すごく懐かしく感じた。扉を開けると、父は机の上に山積みされた書類たちに目を通している最中だった。

俺はわざとわ
「父さん、どうしたんです
かりきつたことを聞いてみた。

か？わざわざ呼びだして」しばらくの間沈黙がながれて、父はやつと口を開いた。

「ロイド、お前はまだ分らないのか。訓練所は危険な場所だ。近づいてはならん。」

そう言いながらも父は仕事をやめようとはしない。

「でも…もう戦争は終わった。訓練所に敵軍がやってくることもない。……じゃあ、安心じゃないか。」

俺が訓練所に行くのは、兵士になりたいとか、いたずらとかそういうわけではない。

父が相手をしてくれるからだ。叱るためだけど…

「確かに。だがお前は何も分かってなどいないようだな。少しお前に質問をしようか。」

そうつと、父はやつと仕事をやめ、はじめて俺の目をみた。

第一章 二話：ロイド2

父さんは、まっすぐ俺の目をみて言った。 「お前はわたしの会社の後継ぎだ。それはわかっているな。」

当たり前だ。俺は今までそのために生きていたのだから。勉強も運動も一番を目指してきたし、友達ともほとんど遊んだことはないし（友達といっても俺が金持ちだから仲良くしておこうとか考えているヤツばかりだ。）

「当たり前ですよ、父さん。僕はそのためにがんばってきたんですから。」

社長になりさえすれば、どんなものでも手に入れることができるようになる。

「我々が今暮らしている星は、非常に資源が豊富で、貿易もさかんだ。そのため非常に金銭的にも豊かで、ほかの星に比べても安全である。」

「一体なにを言いたいんですか。」

父さんが何を考えているのか全然わからない。

「まあ待て。さて、質問だが。お前はいまなお起り続けている惑星戦争のことをどこまで知っている？」「惑星戦争、ですか。確か何年前か前、学校で習いました。資源の乏しい星、もしくは領地を広げたい星などが、他の星を占領し、植民地化させようとしておこるものだと言いましたが。」

俺が住んでいる星では関係のない話だ。資源はたっぷりあるし、領地もかなり広めで何も困ることはない。他の星の戦争に巻き込まれ

たり、馬鹿な大臣があらわれないかぎりは、ほとんど攻撃はうけないだろう。

3年前に近隣の星の争いに巻き込まれはしたが、それ以前は300年前に巻き込まれたくらいだろう。

「そうその通りだ。さすがだな、ロイド。」

すごく久しぶりに誉められて、調子に乗り、つい思っていたことが口にでた。

「これくらい当たり前ですよ。僕は父さんのあとを継ぐ人間だからね。知識で僕にまさる人は、いませんよ。」

父さんはため息をついた。俺はその意味がわからない。自分の息子の頭がいいことを喜ばない親はいないとおもうのだが。

「わたしはお前の育て方を間違えたようだな。」

「なぜですか！？僕は勉強もしてきた、経済のことも星のことも学んできた。これではいけなかったというのですか！」

おかしい。何かいけないことを言っただろうか。

「お前は確かに頭はいい。だが、人間としては非常に弱い。お前の世界は狭すぎる。もっと世界を知る必要があるだろう。」

「ちよっ… 世界なら知っています。ちゃんと学校で勉強してきた。」

「そうじゃない。お前の目で世界をみてきなさい。知り合いにお前のことを頼んでおこう。」

父さんは一度言ったことをまげはしない。

納得などできないが、逆らうことはできない。行くだけ行って、すぐに帰ってきてやる。

「それだけだ。出なさい。詳しいことはまた手紙に書いてメイドにでも預けておく。」

父さんは、再び仕事に戻った。目もみてこないし、話し掛けてもこない。

その次の日、父さんから手紙が届いた。

『愛する息子ロイドへ』

あれから知り合いにお前のことを頼んだのだが、快く引き受けてくれた。

だが、ただ世話になるのも悪いから知り合いがしている店を手伝ってやってくれ。

場所は、惑星^{ゲート}。「ユメノミ」という看板がある店だ。小さな星だからすぐ分かると思うが、地図と連絡先を書いておくのでみるように。お前が世話になるのは、リトルという女性だ。

それでは、お前が成長して帰ってくるのを心待ちにしている。

父^{ゲート}』

惑星^{ゲート}。知らない星だったので、一応調べてはみたが、わかったのは小さいということだけだった。

気は乗らないが仕方がない。

さっさと帰ってきてやるんだ。そんな小さい星、行って何になるというのか。

窓をあけて、星をみた。あの星がゲートだろうか。勝手に予想してみろ。

今日も星がよく見える。

風が穏やかにふく、夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1679b/>

ユメノミ

2011年1月26日16時39分発行